『ペリクリーズ』における癒しのレトリック

高根　広大

1. はじめに

シェイクスピアの『ペリクリーズ』において、タイアの領主ペリクリーズは大王アンタイオカスの怒りを買い、命を狙われる。自分のために自国が攻撃され国民が脅威にさらされることを恐れたペリクリーズは、不安で夜も眠れなくなる。彼の不安を和らげたのは、忠臣ヘリケイナスの、一時外国へ逃れるべきという助言である。これに従うことで辛くも自身と自国民を守るペリクリーズだが、さらに劇中で様々な試練に合い、危機に陥りながら、そのたび乗り越えていく。

『ペリクリーズ』のクライマックスは、やはりペリクリーズとその娘マリーナの再会である。妃だけでなく、娘をも失ってしまったと落胆するペリクリーズは、かつてない憂鬱から船に閉じこもり、王として自国に帰ることもできないでいる。ペリクリーズはほとんど誰の言葉も受けつけない様子であるが、ついにはマリーナの言葉に耳を傾け、互いに親子であることがわかると再会の喜びを分かち合うことになる。

材源であるジョン・ガワーの『恋する男の告解』(*Confessio Amantis*, 1390)から筋書の多くを取り入れた『ペリクリーズ』だが、その演出にはシェイクスピア独自の特徴がある。ガワーの主人公アポロニアスが運命の女神の導きにほとんど依存しているのに対し、シェイクスピアのペリクリーズは周囲の人間の癒しのレトリック、すなわち聞き手に正常な精神や判断力を取り戻させる効果的な言葉によって導かれているのである。(1) 本論では、こうした精神的苦痛を取り除き、望ましい方向へと導いていくような言葉について論じながら、『ペリクリーズ』における波乱に満ちた出来事や奇跡的な再会がどのように演出されているかを論じる。

2. 暴君への諫言と名君への助言

アンタイオカスとその娘が近親相姦の関係にあるという秘密を謎かけに封じ込め、その謎をペリクリーズが明らかにしなければ命を奪われてしまうという構図は、絶対的な権力を持つ君主を前にして、その悪政について諫言することはどこまで可能であるかということを象徴的に描き出している。ペリクリーズはタイアの領主だが、大王アンタイオカスを前にすれば一臣下のように平伏さなければならないほどの権力差がある。謎を解けという命令を遂行できなければ命がないが、謎に隠されたおぞましい

事実を明らかにしてしまえば、やはり命がない。言わば、命をかけて自分に諫言せよという暴君の命令を受けたペリクリーズは、その八方ふさがりの状況を回避するために、慎重に言葉を選んでいる。

> Great king,
> Few love to hear the sins they love to act.
> 'Twould braid yourself too near for me to tell it.
> Who has a book of all that monarchs do,
> He's more secure to keep it shut than shown. (1.1.92-96)

ペリクリーズはまずアンタイオカスが暴君であることに気づきながら「偉大なる王」と呼び、礼儀を尽くしつつ暴君の怒りに触れないように話し始める。それから、謎の答えを言えば「非難することになる」と仮定法を使い、非難に値するという判断を伝えながらも非難という形式をとらないようにする。そして、明かさないほうがアンタイオカス自身にとって安全であると、あくまで相手の立場で助言するのである。

強大な権力者に対して素直に従いにくい場合、どのように答えるか。バルダッサーレ・カスティリオーネの『廷臣論』(*The Book of the Courtier*, 1528 年初版、1561 年英訳)では、レトリックを駆使して主君に奉仕することが理想の宮廷人であるとされているが、そこでは遂行困難な命令を受けた臣下の立場から、次のように議論されている。すなわち、主君の命令に従っても従わなくても身の危険につながる場合、臣下は必ずしも従わなくても良いとされ、また従ったほうが身の安全につながると判断される時には従うべきだというのである (Castiglione 132-33)。従いつつ従わないペリクリーズの言葉は、カスティリオーネの考えを同時に成し遂げることで、巧みに危機を乗り越える手段となっている。謎を解けという命令はアンタオイカスの罪を暴露することにつながるため、暴君の怒りを買うという危険を避けるために遂行を控えなければならない。同時に、何も言わなければ約束どおり死刑となるため、暗に助言するような形をとるのである。こうして、急場を切り抜けたのちに、ペリクリーズは隙を見て逃亡することに成功する。

暴君アンタイオカスに命をかけて諫言しなければならないペリクリーズの状況と同様に、忠臣ヘリケイナスはやはり命をかけて名君ペリクリーズに助言しようとする。ただし、暴君の脅威を前にしたペリクリーズは、厳しい言葉で諫言することを避けなければならなかったが、対照的にヘリケイナスは悩めるペリクリーズのために、たと

え主君の逆鱗に触れようとも恐れず助言し、追従を交えずに話そうと覚悟するのである。

PERICLES
Sit down; thou art no flatterer,
I thank thee for't; and heaven forbid
That kings should let their ears hear their faults hid.
Fit counsellor and servant for a prince,
Who by thy wisdom makes a prince thy servant,
What wouldst thou have me do?
HELICANUS
To bear with patience
Such griefs as you do lay upon yourself.
PERICLES
Thou speak'st like a physician, Helicanus,
That ministers a potion unto me
That thou wouldst tremble to receive thyself. (1.2.58-67)

ペリクリーズはヘリケイナスの態度を君主の「相談役」として高く評価し、「医者」のようであると表現する。そのような叡智を備えた臣下は、まるで立場を逆転させたように、時として主君をも臣下のように、その言葉を良く聞く相手としてしまう。そして、その忠告の言葉は、医者の処方する「薬」にたとえられるのである。

『ペリクリーズ』の主要な材源となっているジョン・ガワーの『恋する男の告解』にも、ヘリカンという、ヘリケイナスに相当する人物が登場する。しかし、ヘリカンの役割はすでに自身の判断でターサスに逃れたアポロニアスと偶然出会い、アンタイオカスに警戒するように伝えるということだけであり、ヘリケイナスのように日頃から重臣として仕えているわけでも、タイアの国を案じているわけでもない (John Gower, *Confessio Amantis*, Book 8, 571-583)。一方、ペリクリーズの宮廷での相談役として信頼されているヘリケイナスは、思い悩んでいる主君にタイアから逃れるように助言することで、主君の命を救うだけでなく、同時にタイアが攻撃される理由を除くことで、主君の統治するタイアまでもアンタイオカスの脅威から守るのである。

こうしたヘリケイナスの役割は、初期近代イングランドで受容された、デジデリウス・エラスムス以来の宮廷人論の伝統に則っている。エラスムスの『キリスト者の君主の教育』(*The Education of a Christian Prince,* 1516)によれば、君主の教育を担う者は「人格高潔にして重厚であり、豊かな経験を持ち、単に知識を身に着けているだけでなく、高齢なるが故の尊厳と真摯な態度からくる威厳を兼ね備え、かつ愛情と好意を

得ることのできるような、明朗にして温和な性格の持ち主」(エラスムス　267-68)でなければならず、またその教育係は「叱責を遠慮するとか、助言者が親身になって忠告できないという事態を、阿りから見過ごす」（エラスムス　320）ようなことがあってはならない。さらに、エラスムスに影響を受けたサー・トマス・エリオットの『為政者論』(*The Boke Named the Governour* 1531)や、前述したカスティリオーネの『廷臣論』では、優れた助言をする宮廷人は医者にたとえられている(Elyot Ai2v, Castiglione 289)。

老練し豊かな経験を持つヘリケイナスは、主君であるペリクリーズを教え導く存在であり、ペリクリーズが臣下を遠ざけ忠告を聞くような雰囲気ではないような時でも、恐れずに率直に忠告し、アンタイオカスの脅威から精神的に病んでいるペリクリーズを癒す医者のような存在である。このようにシェイクスピアがヘリカンをヘリケイナスという老練した忠臣に作り変えたことは、運命の女神が人間を翻弄しつつ導く中世の物語を、レトリックという人間の美徳によって運命の女神に抗い挑んでいく物語へと書き換えたことを示す例の一つであると思われる。『恋する男の告解』において「運命の女神は気まぐれではあるが、時には愛に忠実な者に行為を示すのだ」(2012-2013)と結論づけられている物語は、『ペリクリーズ』では「すさまじい破壊の嵐に耐え抜いた美徳が天の導きにより、ついには歓喜の栄冠を戴く様子が描かれる」(Epilogue 4-6)物語へと変貌を遂げているのである。(2)

3. 愛欲を静める言葉

アンタイオカスとその娘が近親相姦という不健全な父娘関係にあるとすれば、対照的にサイモニディーズとタイーサは健全な父娘関係にある人物として、ペリクリーズの前に現れることになる。アンタイオカスの娘と同様、タイーサもまた集まってくる求婚者の目標であり、欲望の対象とはなりえても、自らの欲望を露骨に示すことはない。しかし、馬上槍試合に勝利し、立派な騎士としての姿を見せたペリクリーズに対し、タイーサは心を奪われ、宴会の席だというのに食欲を失ってしまうと、自身の抑圧された欲望を垣間見せることになる。どういうわけか、父であるサイモニディーズにも食欲がなくなっている。

SIMONIDES　　Sit, sir, sit.

[*aside*] By Jove I wonder, that is king of thoughts,
These cates resist me, he but thought upon.
THAISA [aside]
By Juno, that is queen of marriage,
All viands that I eat do seem unsavoury,
Wishing him my meat. [to *Simonides*] Sure he's a gallant gentleman. (2.3.26-31)

味を感じることができない食べ物と比較して、「彼を私の肉として望む」と傍白で言うタイーサは、婚姻関係を結ぶ前にも関わらず性的な欲望を内に秘め、自身の精神が通常ではないことを自覚している (Gossett 252n)。タイーサの秘められた欲望はアンタイオカスの娘と同様であり、サイモニディーズとの不思議な感覚の共有も、アンタイオカスとの秘密の関係に近いものとなっている。

ペリクリーズはアンタイオカスの娘に求婚し、謎解きをすることで不健全な父娘関係に気づき、一臣下のように暴君アンタイオカスに対して諫言しなければならない状況となる。しかし、アンタイオカスは諫言を受け入れず、従って不健全な精神が治療され、不健全な父娘関係が解消されることもない。同様に、嵐の末に流れ着いたペンタポリスでもまた、ペリクリーズは一臣下のように馬上槍試合に臨み、試練を乗り越えて名君サイモニディーズとタイーサという父娘の前で言葉を交わすことになる。サイモニディーズはタイーサがペリクリーズに想いを寄せていることを示す手紙を持ち出すが、この手紙はアンタイオカスが見せる謎の文書と同様に、ペリクリーズの命を危ぶませている。ペリクリーズはサイモニディーズを出しぬいてタイーサに近づいたことなどないことを必死に訴える。

PERICLES
Then as you are as virtuous as fair,
Resolve your angry father if my tongue
Did e're solicit or my hand subscribe
To any syllable that made love to you?
THAISA
Why, sir say if you had,
Who takes offence at that would make me glad? (2.5.65-70)

宴会が終わってからも、タイーサに求婚するため面会を求める者が後を絶たない中、タイーサは自分の部屋に引きこもってしまう。しかし、アンタイオカスの娘への求婚と異なるのは、ここでペリクリーズが求婚を否定する言葉によって、かえって自分の殻に閉じこもるタイーサを引っ張り出すことに成功することである。暴君アンタイオ

カスへの諫言は受け入れられないが、名君ペリクリーズが忠臣ヘリケイナスの言葉を受け入れるように、名君サイモニディーズとその娘もまた誠実なペリクリーズの言葉を受け入れるのである。そうすることで、タイーサの内に秘めた欲望は、結婚関係という健全な男女関係の中に結実することになる。

性的な欲望を鎮静化させる力を秘めた言葉は、ペリクリーズの娘マリーナに引き継がれ、より強力なものになる。数奇な運命の末に売春宿に引き取られたマリーナだが、客としてやってくる男たちに説教をして、次々に改心させてしまう。ミティリーニの太守ライシマカスは明らかに邪な欲望を抱いた様子で売春宿を訪れるが、マリーナの話を聞いているうちに滑稽なまでに急に心を入れ替える。

MARINA
If you were born to honour, show it now;
If put upon you, make the judgement good
That thought you worthy of it.
LYSIMACHUS
How's this? How's this? Some more, be sage.
[…]
I did not think
Thou couldst have spoke so well, ne'ver dreamt thou coudst.
Had I brought hither a corrupted mind
Thy speech had altered it. (4.5.96-99, 106-09)

本来美徳を備えて生まれたはずのライシマカスは、同じ邪淫の罪を犯しているとしても、暴君アンタイオカスのように治療不可能というわけではない。精神的に一時的な異常があったとしても、マリーナの言葉によって正しい判断力を取り戻すことができるのである。欲望を抱いて来たことさえ突然否定し始めるライシマカスの変貌ぶりは、ペリクリーズを追いつめるようなことを言いながら突然結婚を認めるサイモニディーズの場面と同様、驚くべき展開によって誠実な言葉の効力が一層高められている。ペリクリーズはサイモニディーズの承認を得て結婚することでタイーサの秘めた欲望を健全な愛情へと変えるが、マリーナは自身の言葉だけでライシマカスの心を入れ替えさせ、その上で身分さえ伴えば妻として迎えたいと思われるようになる。

4. 孤独と喪失感を癒す言葉

かつて嵐の中の船上で妻タイーサを失い、さらにターサスのクリーオンとダイオナイザに預けていたはずの娘マリーナまで失ったことで、ペリクリーズは心を閉ざしてしまう。その喪失感は忠臣ヘリケイナスにも癒しようがなく、ペリクリーズはタイアの領主として帰国することもなく、ただミティリーニ沖に漂うだけである。しかし、ライシマカスがペリクリーズの船を訪ねることで、ヘリケイナスはペリクリーズの心を癒すかもしれない人物の評判を耳にすることになる。ライシマカスはマリーナを呼び出し、次のように言う。

Fair one, all goodness that consists in bounty
Expect even here, where is a kingly patient.
If that thy prosperous and artificial feat
Can draw him but to answer thee in aught,
Thy sacred physic shall receive such pay
As thy desires can wish. (5.1.63-68)

ヘリケイナスの助言を医者の処方する薬として受け入れることで不安を取り除いたペリクリーズは、ここでも再び「患者」として扱われている。「神聖な医術」とあるが、タイーサを助けたセリモンのように、マリーナは実際に医術を心得ているわけではなく、ライシマカスを改心させたような誠実な言葉を持つのみである。

サラ・ベックウィズによれば、優れた助言をすることができる忠臣ヘリケイナスにもペリクリーズの心の病を癒せないのは、その病の原因が家族を失ったことによる孤独と喪失感に拠るものだからである。話すべき家族も、声を聞くべき家族も失ったことが、そのままペリクリーズの声を枯れさせ、耳を閉ざさせている (Bechwith 99)。マリーナの歌という才芸は、叡智ある重臣の助言に匹敵する美徳を兼ね備えているかもしれないが、それだけではペリクリーズの心を癒すことはできない。マリーナはペリクリーズに突き飛ばされ、次のように言う。

MARINA
My lord, that may be hath endured a grief
Might equal yours, if both were justly weighed.
Though wayward Fortune did malign my state,
My derivation was from ancestors
Who stood equivalent with mighty kings,
But time hath rooted out my parentage,
And to the world and awkward casualties
Bound me in servitude. [aside] I will desist,

But there is something glows upon my cheek
And whispers in mine ear, ‘Go not till he speak.’
PERICLES
My fortunes – parentage – good parentage –
To equal mine. Was it not thus? What say you? (5.1.78-89)

「自分と等しい」境遇を明かしてみせたマリーナに、ペリクリーズは突如心を開く。マリーナは直感的にペリクリーズとの絆を感じ取り「彼が話すまで行くな」という声を聞くが、身の上を話したのはこの絆が無意識に表れたものであるとも言える。ペリクリーズに対する共感を率直に表したマリーナの言葉が、そのままペリクリーズとの絆を示したものとして、耳を閉ざしているはずのペリクリーズにも届くのである。

ペリクリーズはマリーナの声を「銀の声」(5.1.101)と形容し、マリーナ自身のことは「銀の衣を纏う処女」(5.3.6-7)と表現している。美しい音楽で夢の世界に誘い込み、エフェソスに行けば「銀の弓」にかけて祝福するとペリクリーズに夢の中で約束する「銀の女神」ダイアナの声は、美しい歌を歌い、誠実な言葉でペリクリーズの心を癒し導くマリーナを象徴するものである。運命の女神に翻弄され続けてきたペリクリーズは、ここにおいて処女神ダイアナの化身である娘、マリーナに導かれることになる。(3) ペリクリーズは娘であるマリーナを「厳粛で高潔な相談役」(5.1.172)と呼び、臣下であるヘリケイナスに対してと同様に信頼している。ヘリケイナスに教えを乞うとき、ペリクリーズは臣下であるヘリケイナスに対し、自分のほうが臣下のような存在であると考えたが、父が導くはずの娘マリーナが今度は父の導き手となる。(4)

エフェソスに着くと、ペリクリーズはマリーナと同様、率直に身の上を語る。すると、マリーナの声がペリクリーズの関心を大いに引き出したように、ペリクリーズの声はタイーサの耳を惹きつける。マリーナの言葉がペリクリーズの心を癒し、二人の父娘関係を回復させたように、処女神ダイアナに導かれたペリクリーズの言葉はタイーサの孤独を癒し、二人の夫婦関係を回復させるのである。

5. おわりに

ペリクリーズとその家族は波乱に満ちた境遇を、医術にたとえられた癒しのレトリックによって本来の美徳を保ち続けることで乗り越えていく。率直で誠実な助言や忠告はもともと美徳を備えていた者には響くが、上辺だけの追従を好む暴君には響かな

い。『ペリクリーズ』はコーラス役のガワーがエピローグで言うように、運命の女神に抗う美徳を持った者たちの驚嘆すべき物語を描き出しているが、その奇跡的な出来事の演出は、ルネサンス期イングランドで大いに注目された教養である、助言や忠告の知識と技術に支えられているのである。

注

(1) コンスタンス・ジョーダンは一見して神秘的な力に導かれているように思われる『ペリクリーズ』の筋書きが、実は人間の持つ美徳によって導かれていることを指摘している (Jordan 67)。
(2) 本論におけるジョン・ガワーの『恋する男の告解』の日本語訳については、伊藤正義訳を参照している。
(3) ダイアナと重ね合わせられるマリーナのイメージについては、サイモン・パーフリーが指摘している (Palfrey 212)。
(4) アンドリュー・ヒスコックは娘であるマリーナによる父ペリクリーズの導きという逆転性に注目している (Hiscock 28)。

参考文献

Beckwith, Sarah. *Shakespeare and the Grammar of Forgiveness*. Ithaca and London: Cornell UP, 2011.

Buchanan, George. *George Buchanan's Law of Kingship.* Trans. and Eds. Martin S Smith and Roger A. Mason. Edinburgh: The Saltire Society, 2006.

Castiglione, Baldesar [Baldassare]. *The Book of the Courtier.* Trans. George Bull. Harmondsworth: Penguin Books, 1967.

Cooper, Helen. *Shakespeare and the Medieval World.* London: Thomson Learning, 2010.

Elyot, Sir Thomas. *The Boke Named the Governour*. London, 1531.

Gower, John. *Confessio Amantis of John Gower.* Ed. Dr. Reinhold Pauli. Vol. 3. London: Bell and Daldy, 1857.

Green, Henry. *Shakespeare and the Emblem writers: an Exposition of their Similarities of thought and expression Preceded by a view of emblem-literature down to A. D. 1616.* London: Trübner, 1870.

Hiscock, Andrew. "*Pericles, Prince of Tyre*: *Prince of Tyre* and the appetite for narrative." *Late Shakespeare, 1608-1613.* Eds. Andrew J. Power and Rory Loughnane. Cambridge: Cambridge UP, 2013.

Jordan, Constance. *Shakespeare's Monarchies: Ruler and Subject in the Romances.* Ithaca, NY: Cornell UP, 1997.

Machiavelli, Niccolò. *The Discourses.* Ed. Bernard Crick. Trans. Leslie J. Walker Harmondsworth: Penguin Books, 1974.

---, *The Prince*. Trans. George Bull. London: Penguin Books, 2003.

---, *Il prncipe di Niccolò Machiavelli.* Italia, 1814.

Palfrey, Simon. *Late Shakespeare: A New World of Words*. Oxford: Clarendon Press, 1997.

Patch, Howard R. *The Goddess Fortuna in Mediaeval Literature.* Cambridge: Harvard UP, 1927.

Shakespeare, William. *Pericles.* Ed. Suzanne Gossett. London: Thomson Learning, 2004.

Smith, Sir Thomas. *De Republica Anglorum*. Ed. Mary Dewar. Cambridge: Cambridge UP, 1982.
Wilkins, George. *Pericles, Prince of Tyre. A Novel by George Wilkins, Printed in 1608, and Founded Upon Shakespeare's Play. Edited by Professor T. Mommsen, With a Preface by the Editor and an Introduction by J. Payne. Collier.* Oldenburg: Gerhard Stalling, 1857.
エラスムス、デジデリウス『宗教改革著作集』第 2 巻、金子晴男、木ノ脇悦郎、片山英男訳（教文館、1989）
ガワー、ジョン『恋する男の告解』伊藤正義訳（篠崎書林、1980）